

「チームとしての学校」に向けた 組織的な支援の手立てに関する研究

— 養護教諭による情報発信と連携の工夫を通して —

加藤 美由¹

「チームとしての学校」においては、学校に関わる全ての職員がチームの一員であり、関係者間の情報共有が重要であるとされている。しかし、現状では勤務形態の異なる職員との情報共有は難しく、十分とは言えない。本研究では、校内の情報共有を目指し、子どもの心身の健康情報の発信と、連携の工夫を行った。その結果、教職員の支援に携わる意識の高まりが見られ、組織的な支援の推進につながった。

はじめに

中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」（以下、答申「チーム学校」という）では、「教員とともに教育活動に当たる人材」を専門スタッフと定義し、「教員も専門スタッフも『チームとしての学校』の一員」（中央教育審議会 2015 p. 11 p. 15）であると示されている。さらに、「教職員がチームで、問題を抱えた子供たちの支援を行うことが重要である」（中央教育審議会 2015 p. 8）と述べられている。

チームで支援する体制について、神奈川県では、独自に教育相談コーディネーター（以下、「CO」という）を軸とした支援体制づくりが進められている。平成27年度神奈川県立総合教育センター研究集録第35集「神奈川の支援教育の成果に関する調査研究—教育相談コーディネーターの取組に焦点を当てて—」（以下、「研究集録」という）によると、神奈川の支援体制は、「チームで支援する体制が整ってきた」という成果が報告されている。一方、「短時間勤務の再任用教職員や非常勤の教職員などは、教職員同士で話をしたり、生徒との関係を作ったりする時間が少ないため、生徒理解や支援の方針について共有を図りにくい」という課題が指摘されている。

所属校でも、COを軸とした支援体制が整ってきている。しかし、小学校では、校内に子どもたちがいる時間帯に職員同士で支援の情報を共有することが非常に難しいという現状がある。情報を共有する時間は、必然的に放課後になるため、短時間勤務の再任用教職員や非常勤の教職員など、勤務形態の異なる職員（以下、「非常勤職員」という）は、支援の情報を共有することが困難である。

しかし、校内で非常勤職員が情報を共有することが

1 厚木市立上依知小学校

研究分野（一人ひとりのニーズに応じた教育研究支援教育）

困難な状況であっても、子どもや保護者にとっては、学校で子どもと関わる人は全て「先生」であり、「先生」に求める対応は同じである。特に支援を必要とする子どもとの関わりには、その子どもについて情報を得ているか否かで対応に大きな差が生まれるため、支援の情報について共有を図ることが重要となる。

このようなことから、校内の支援体制の一層の推進を図り、教職員がチームとして支援を行うためには、非常勤職員も含めた全教職員間での情報共有と連携の工夫が必要だと考えた。

研究の目的

養護教諭が保健室来室者の心身の状態を把握し、情報を学級担任などと共有した結果、組織的なチーム支援につながったという先行研究がある（城所 2014）。本研究では、さらに、非常勤職員も含む全教職員で情報を共有し、校内全体で支援に携わる意識を高めることが、組織的な支援の推進につながると考え、研究の目的を次のように設定した。

<研究の目的>

養護教諭が行う、子どもの心身の健康に関する情報共有の工夫により、教職員一人ひとりがチームの一員として子どもの支援に携わる意識を高め、現在の支援体制の一層の推進を図る。

研究の内容

1 事前調査

(1) A市内小学校養護教諭へのアンケート調査

本研究を進めるにあたり、A市内小学校養護教諭に協力を得て、主にCO・非常勤職員との情報共有と連携について、養護教諭としての工夫や課題を自由記述で回答するアンケート調査を行った（回答数 21 校）。

調査の結果、養護教諭は会話を中心としたコミュニケーションを意識して行っており、教職員との情報共

有と連携を円滑に進めようと努力していた。具体的な工夫として、「非常勤職員に対しては、顔を見たら声を掛けるようにしている」、「職員会議などで保健室の情報を伝えている」、「職員室の座席配置をCOの近くにしてもらっている」などが挙げられた。

一方、COとの情報共有と連携についての課題としては、COが学級担任であったり、複数の分掌を担当していたりすることや、養護教諭自身の多忙などが影響して、実際には、お互いの時間を合わせて情報共有することが困難な現状もあることが分かった。また、養護教諭は、非常勤職員に対して「養護教諭や学級担任とは違う視点で子どもたちを支援してくれている」、「子どもに寄り添った支援をしているため、担任が知らないことも知っている」など、子どもの支援のためには重要な存在であるという認識をしていた。しかし、実際は、非常勤職員の勤務日数や勤務時間が限られているため、情報共有と連携の時間がなかなか取れないという課題が16校から挙げられた。特に、スクールカウンセラー(以下、「SC」という)は、月に1～2回の勤務であるため、「細かい情報を共有することができない」と回答する養護教諭もいた(第1表)。

第1表 非常勤職員との連携と課題

	スクール カウンセラー	心の相談員	専科非常勤 学習支援員 再任用職員
勤務	月1～2回 10:30～18:15	週2回 10:30～14:30	週2～5回 勤務は各々異なる
連携の工夫	・会話による情報共有、連携を意識して行っている		
連携の課題	・勤務日数、勤務時間が限られるため、細かい情報が共有できない、連携が不十分 ・誰とどこまでの情報を共有したか、分からなくなる		

(2) 校内調査(聞き取り調査)

所属校において、子どもを支援するための情報共有について現状を把握するため、全教職員を対象とした聞き取り調査を行った。調査の結果を、常勤職員と非常勤職員に分けて比較したところ、両者の情報を伝える方法と情報を得る機会に差があることが分かった(第2表)。

常勤職員の情報共有の機会は、放課後の職員打合わせや、職員会議で設定されている児童指導連絡会(以下、「児童指導連絡会」という)、放課後の職員同士の会話という回答が多かった。一方、非常勤職員は、子どもとの関わりの中で気付いたことをその場で学級担任に伝え、その会話を通して子どもに関する情報を得ているという回答が多かった。

常勤職員が感じている情報共有に関する課題として、「会話による共有方法は、時間がないときには行えない」、「SCや心の相談員などと話す機会がない」

という回答があった。非常勤職員が感じている情報共有に関する課題として、「子どもの課題を知らないため、気になることがあっても声掛けに迷う」、「子どもへの対応で、先生方が忙しそうなので話しかけられない」という回答があった。

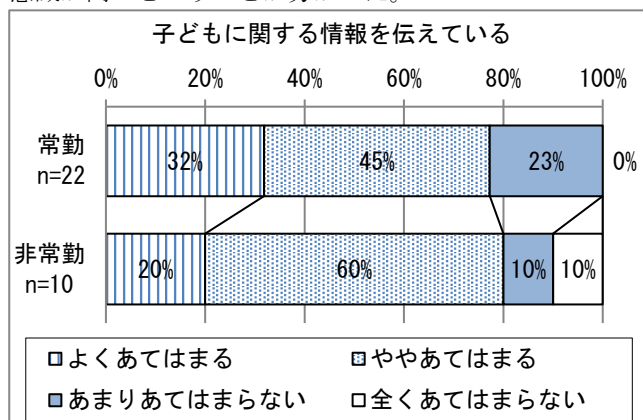
さらに、SCに、校内の情報共有と連携について感じていることを聞き取った結果、「常勤職員間の情報共有はよくできていると思うが、その情報をSC自身が共有できる方法を確立できていない」という意見も得られた(第2表)。

第2表 校内の情報共有の現状

()内は回答した人数、複数回答あり

	常勤職員 22名	非常勤職員 10名
情報を伝える方法	・児童指導連絡会(6) ・放課後の会話(17)	・その場で担任に伝える(6) ・メモを置く(2)
情報を得る機会	・児童指導連絡会(17) ・放課後の会話(8)	・担任との会話(3) ・給食時間の雑談(2)
課題	・時間がない時は伝えきれない(5) ・SC、相談員などと話す機会がない(2) ・児童の顔と名前が一致していない(5)	・児童への声掛けに迷う時がある(4) ・先生方が忙しそうで話せない(3) ・伝えるべき情報がどうか迷う(2)
SCの意見		
<ul style="list-style-type: none"> ・常勤職員間の情報共有はよくできていると感じる ・養護教諭からは、多くの情報をもらっている ・COが担任のため、時間的に連携が難しい ・学校のパソコンで支援の情報が見られるといい 		

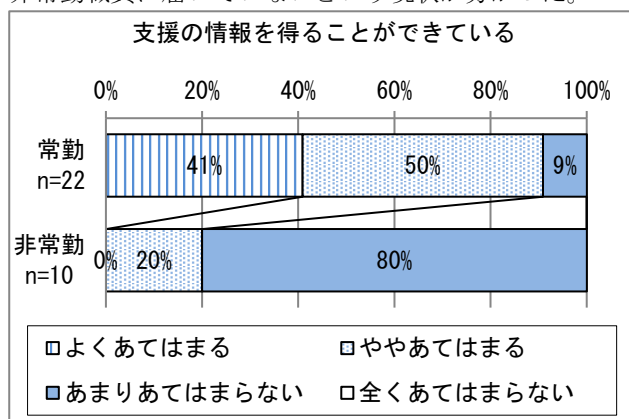
また、「子どもに関する情報を関係職員に伝えている」という質問に対しては、常勤職員77%、非常勤職員80%が「よくあてはまる」、「ややあてはまる」と回答した(第1図)。この結果から、教職員は皆伝える意識が高いということが分かった。



第1図 情報を伝えている意識

一方、「支援の情報を得ることができている」という質問に対しては、「よくあてはまる」、「ややあてはまる」という回答が、常勤職員91%に対し、非常勤

職員は20%という結果であった(第2図)。この結果から、現在の情報共有の方法では、支援に関する情報が非常勤職員に届いていないという現状が分かった。



第2図 情報を得ている意識

(3) 事前調査における共通課題

A市内小学校養護教諭のアンケート調査と校内の聞き取り調査から、明らかになった共通の課題は、教職員間で情報を共有する機会の不足であった。

2 研究の手立てと内容

事前調査により得られた課題を基に、養護教諭としてできる保健室情報の発信と連携の工夫に焦点をあてて、研究の手立てを考えた。まず、答申「チーム学校」の「関係者間の情報共有が重要となることから、相互に十分なコミュニケーションを取ることができるようにする必要がある。ICT機器等も活用し、共有すればよいもの、相談することが必要なものなど、情報の重要性等を勘案して、コミュニケーションの充実に取り組んでいくべきである」(中央教育審議会 2015 p.15)と示された方向性を参考にした。そこで、保健室情報の中でも、確認するだけで分かる情報は、パソコンや紙面を利用して共有することとした。さらに、「研究集録」と事前調査の課題から、非常勤職員と情報を共有する機会を設けることとした。

これらの手立てにより連携が進み、教職員で行うチーム支援が一層推進されるのではないかと考えた。

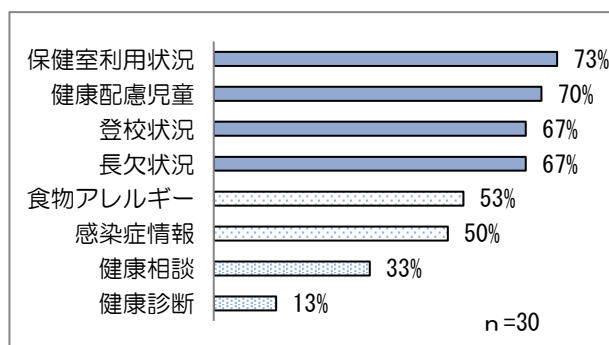
(1) 共有する情報の絞り込み

共有する情報については、校内調査(聞き取り調査)で「保健室から得たい情報は何か」という設問で回答項目を示し、複数選択可能な条件で聞き取った(第3図)。

その結果、回答数の多かった項目の中から、教職員が日常的に把握することが必要と思われる、次の四つの項目を選び、共有する情報とした。

- <共有する保健室の情報>

 - ・保健室利用状況
 - ・健康配慮児童
 - ・登校状況
 - ・長欠状況



第3図 保健室から得たい情報(複数選択可)

(2) 情報発信と情報共有の手立て

課題解決のための情報発信と情報共有については、次のア～エの四つの手立てを実施することとした。また、「個人情報保護」の観点から、パソコンや紙面を利用した情報発信の内容は必要最小限にし、校内での取り扱いについて再確認した。

<実施期間>平成28年9月8日(木)～10月31日(月)

ア 保健日誌の活用

保健日誌は、日々の養護活動、保健室利用状況、登校状況などを記録する日誌である。この保健日誌を管理職の机の上に置くことで、教職員が管理職機の横にある出勤簿に押印する際、前日の保健日誌の記録を容易に確認できるようにした。

<発信した情報>

- ・保健室利用状況
 - ・登校状況

イ パソコンを利用した情報発信ツール「ほけんしつ」の作成

Excelを利用し、「ほけんしつ」というツールを作成した。「ほけんしつ」に保健室情報をまとめ、パソコン内の校内共有フォルダを活用して情報発信を行った。保健室情報は、保健管理ソフトのデータを利用することで、スムーズに日々の更新ができるよう工夫した。更新は、養護教諭が保健管理ソフトへ登校状況を入力した後、養護教諭自身で行った。情報を保護するため、教職員が情報を見る際には、パスワードを必要とし、閲覧のみでデータの書き換えはできない設定とした。

<発信した情報>

- ・保健室利用状況(頻回来室)・当日の登校状況
 - ・長欠状況(長欠傾向を含む)・保健室からの連絡

ウ 給食時間を活用した情報共有時間「ランチミーティング」の設定

職員室で給食を食べている教職員と、子どもの情報を共有する時間として「ランチミーティング」を、週に1回任意参加として、設定した。養護教諭から、保健日誌や「ほけんしつ」の情報に加え、不登校傾向児童、健康配慮児童などについて、経過も含めた話をした。参加者からは、養護教諭が話題にした子どもについての情報提供や、その他気になったことなどの話が

あった。

＜ランチミーティングの内容＞

①養護教諭より

- ・不登校傾向児童の近況報告
- ・健康配慮児童について
- ・その他、知らせたいことについて

②参加者より

- ・気になったこと、聞きたいことについて

③その他

参加者 ※任意参加で10～13名程度
管理職、教務主任、教科担当、養護教諭、栄養士、
事務職員、非常勤職員

エ 情報を伝えるツール「連絡用紙」の作成

子どもの様子で気付いたことがあっても、勤務時間中に情報を伝えることが困難な教職員のためのツールとして、連絡用紙を作成した。記入された連絡用紙は、指定の箱に回収し、養護教諭が管理した。放課後、養護教諭と該当する学級担任などで記入内容を確認することで、情報共有を行った。

(3) 組織的な支援に発展した事例

ア 事例1

養護教諭が発信した情報から、ランチミーティングで情報共有が進み、組織的な支援につながった事例を報告する。

高学年 女子A 不登校傾向

2学期から欠席、遅刻が目立つようになった。家庭に連絡し、様子を尋ねると、母は遅刻して登校させると言うが、結局欠席してしまう日が多くなった。

学級担任・COなどとの情報共有や、保健日誌・「ほけんしつ」の情報をもとに、養護教諭がランチミーティングでAのことを話題にした。ランチミーティング参加者からは、登校時の様子、授業中の様子、休み時間の様子などの情報が挙げられた。

＜事例1のケース会議＞

Aについて、学級担任からの情報や、養護教諭がランチミーティングで得た情報などを、COが整理した。すると、「いつも不安そうにしている」、「意欲的に授業に参加している」、「友達から孤立している」、「自己表現力が豊か」など、関わる人によってAへの印象が違っていた。このことから、本人の課題を見極めるために、Aへの理解を深める必要があることが分かった。教職員はAと関わる中で情報を集めることと、Aが自己肯定感を高められるような関わりを持つことを支援の目標とした。さらに、学級担任は、Aの保護者と話し合う機会を持ち、連携できる関係を作ることとした。

その目標は、児童指導連絡会とランチミーティングなどで共有された。その結果、Aを気にかける教職員が増え、Aへの声掛けが多くなった。遅刻した時の登

校時刻や誰に送ってもらっていたかななどの情報を、その場で見掛けた教職員が保健室へ知らせに来てくれることもあった。さらに、継続して情報を共有することで、Aをチームで見守っていく体制が生まれた。

イ 事例2

ランチミーティングにて、ある学級に対する困り感を非常勤職員が話題にしたことから、情報共有が進み、組織的な支援につながった事例を報告する。

中学年 学級風土が不安定な学級

授業中、ふざけた発言が多く学級全体が落ち着かず、教師の指示も通りにくい状態が続いている。学級内のトラブルが原因で精神的に不安定な児童も出てきた。

児童指導連絡会では、近々ケース会議を開く必要があると注視されていた学級だった。そのような折、ある日のランチミーティングで、非常勤職員の一人から、児童の多くが授業で使用する持ち物を持って来ないことや、授業が成立しにくい状況に困っているという話があり、その場で、この学級に関わる教職員が詳しく現状を話し合う機会になった。

その後、養護教諭はランチミーティングの内容を学級担任・COなどと共有し、ケース会議へ発展した。

＜事例2のケース会議＞

このケース会議では、子どもたちの良い面を伸ばすことを目標に話し合いを進めた。ランチミーティングにおいて、ある専科の非常勤職員の授業では、子どもたちが意欲的に授業へ取り組んでいることが分かったため、この非常勤職員の指導方法、声掛けのタイミングなどを共有し、学級担任を中心とした学級指導の改善策も話し合った。

支援の目標は、児童指導連絡会やランチミーティングなどで共有された。その後行われた具体的な支援として、学級担任・養護教諭・COそれぞれが、学級活動の時間を使用し、学級規律・心の成長・人間関係づくりについて、当該学級へ「心の授業」を行った。さらに、自己肯定感を高めることを目指して、支援部の一人が担任をしている低学年の学級と、交流授業を行った。教科担当は、指導の改善策を知ること、自身の指導方法にいかした。学習支援の非常勤職員は、子どもたちの学習意欲を高めるような声掛けを継続して行った。栄養士は配膳指導の中で、良い面を積極的に褒めた。他にもSCや心の相談員など、様々な立場の教職員が学級の課題と支援の目標を共有したチームの一員として、継続的に関わりを持つことができた。

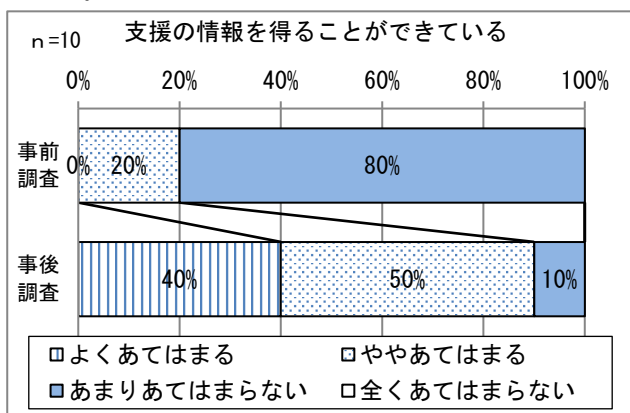
3 手立てによる成果と課題

情報発信と情報共有の手立ての成果と課題を把握するために、校内教職員を対象に事後調査を実施した。

(1) 手立てによる成果

事前調査では、「支援の情報を得ることができている」という質問に対し、「よくあてはまる」、「やや

あてはまる」と回答した非常勤職員は20%であった。非常勤職員の意識の変化を探るため、同様の質問を事後調査でも実施した結果、「よくあてはまる」、「ややあてはまる」と回答した非常勤職員が90%に増えた(第4図)。この変化は、今回、実施した手立ての成果である。



第4図 非常勤職員の意識の変化

さらに、事後調査の記述から、今回の成果について考察を行った。

<保健日誌について>

- ・すぐに手に取って見ることができたので、様子を知ることができた。(非常勤)
- ・来室状況が細かく分かり、朝のあいさつの声掛けに役立った。(常勤)
- ・けがや手当ての状況などを具体的に知ることができて、子どもへの声掛けや対応をする上でも参考になった。(非常勤)

保健日誌の情報は、子どもへの声掛けや対応に役立ったという意見が多かった。日常的にはパソコンを使用しない教職員や、保健日誌が置いてある場所に席が近い人ほど、頻繁に日誌を確認している傾向があった。

<「ほけんしつ」について>

- ・有益な情報を見ることができる。自分の学級だけでなく、他の学級の子の状況が分かるため、指導にいかしやすい。(常勤)
- ・とても見やすく分かりやすかった。操作が簡単なので、今後も活用していきたい。(常勤)
- ・長期欠席児童など、学習支援に入った際に学習の様子を見てあげることができた。(非常勤)

パソコンを日常的に使用する教職員にとって「ほけんしつ」は、確認しやすい手立てであった。自身の学級だけではなく他の学級の様子も分かることから、他の学級の子どもの声掛けの意識の高まりが見られた。

「ほけんしつ」は、一目で欠席や遅刻の累計が分かるため、登校状況を気にかけるべき子が分かりやすかったという意見が多かった。遅刻が減ってきた子の学級担任からは、「確認するたびに自分の励みになった」という記述もあり、子どもとの関わりに対する教職員自身の意欲向上にもつながっていた。

<ランチミーティングについて>

- ・困ったことなどを、先生たちと話すことができよかった。授業に大変役立っている。(非常勤)
- ・様々な場面での様子を知ることができて担任や児童に声掛けするきっかけとなった。(非常勤)
- ・食事をしながらできたのが良かった。10人超の先生を集めるのは、放課後でも大変である。(常勤)
- ・実際に指導されている先生の話聞くことができ良かった。(非常勤)
- ・給食の短い時間の中で、子どもたちの様子について詳しく分かった。(非常勤)
- ・情報共有の場となり、ありがたかった。(CO)

ランチミーティングは、常勤職員、非常勤職員相互の情報共有の場となった。養護教諭が話題にした子どもについて、日頃関わりのある教職員から、重要な情報を得ることができた。「声掛けをするきっかけとなった」、「指導に役立っている」などの記述からも、子どもの支援につながる成果であることがわかる。

<連絡用紙について>

- ・たくさんの子どもの様子を教えてもらい、違う視点からの意見がとても参考になった。(常勤)
- ・子どもを褒めるきっかけにもなり、子どもの成長を嬉しく思った。(常勤)
- ・時間を気にせずに伝えられるので、内容の重要度や有益度に関わらず、ささいなことでも気軽に記入ができたことが良かった。(非常勤)

連絡用紙は、学級担任とは違った視点から、非常勤職員が子どもの様子を知らせることができる、重要な手立てとなった。その知らせを受けた学級担任からは、子どものきめ細やかな指導につながったという意見が多かった。さらに、連絡用紙がきっかけとなり、学級担任と非常勤職員が話し合い、連携する姿も見られた。

<手立て全体について>

- ・非常勤の先生方からの、担任とは異なる視点での子どもの授業中の様子などの情報が、支援の目標を考える際、とても役立った。(常勤)
- ・遅刻の多い他学年児童が登校できたとき、たくさん声を掛けることができた。(常勤)
- ・情報を定期的に得られることで、気にかけるべき児童がわかり、学習支援に入る際に目を配ることができた。事情を知っていることで声掛けもしやすく、積極的に声を掛けることができた。(非常勤)

手立て全体についての記述からは、非常勤職員から得た情報が、支援の目標を検討する際に、重要な情報となったことがわかる。さらに、多面的に子どもの情報を知ることにより、教職員一人ひとりが積極的に子どもと関わることもできたという様子を読み取れた。これらは、手立てによる支援体制推進の成果とみなすことができる。

(2) 手立てによる課題

事後調査の記述から、手立ての課題について考察を

行った。

<保健日誌について>

・まだ習慣になっていないこともあるが、確認を毎日することができなかつた。続けていくことで定着し、意味と価値が出てくると思う。(常勤)

<「ほけんしつ」について>

・見よう、という意識が必要。(常勤)
・保健日誌よりも見る頻度が低くなつた。(非常勤)
・パソコンの前に座らないと見られない。(非常勤)

<ランチミーティングについて>

・時間が短いので無理がある気がした。今回は研究員の来校に合わせ不定期だったせいもあるかもしれない。「毎週〇曜日」と固定すれば、だんだん慣れて内容も充実していくと思う。(常勤)
・保健室の視点、長欠児童の報告に特化されていたが、それ以外にも課題を抱えている子が沢山いると思う。(非常勤)

<連絡用紙について>

・学級担任ではないため、連絡用紙の記載内容を見る機会がなかつた。(常勤)

保健日誌の活用と「ほけんしつ」については、2か月間では教職員が確認することを習慣化できなかつたという課題がある。「続けていくことで定着し、意味と価値が出てくる」という意見からも、継続した取組の中で、習慣化に向け今後さらなる工夫を行いたい。

また、ランチミーティングでは、非常勤職員間でも、これまでに得ている情報量に差があることが分かつた。そのため、成果と言える意見がある反面、保健室情報の共有だけでは足りないという意見も出る結果となつたと考えられる。今後、短い時間の中で充実した内容を共有していくためには、曜日設定を工夫し、習慣化していくことも検討する必要がある。さらに、子どもの支援に関する情報は多岐に渡るため、今後は、支援部と連携した情報共有の手立てを講じていくべきである。

連絡用紙については、チームで共有できるように、共有方法、共有範囲を見直す必要がある。

研究のまとめ

1 研究の成果

保健室情報の発信方法の工夫から、教職員がチームの一員として、子ども一人ひとりを気かけ、声を掛ける意識の高まりが見られた。さらに、情報共有の方法を工夫することで、今まで得ることができなかつた、非常勤職員の多様な視点からの情報を共有することができた。その情報を、学級担任・COなどと共有することで、ケース会議へつながつた。ケース会議で話し合われた内容や支援の目標は、児童指導連絡会での共有に加え、ランチミーティングなどを利用して、非常勤職員とも共有することができ、校内連携につながつた。教職員一人ひとりが、チームの一員として、多様

な視点で子どもたちを見守り、それぞれの立場をいかした支援を行うことができた。これらが本研究の成果であり、この手立てはチームとしての支援の推進に有効だったと考えられる。

2 研究の課題と今後の展望

本研究は、養護教諭の立場や視点から、組織的な支援体制の推進を行ってきた。その中で、実際に支援を必要とする子どもが抱える課題は、多岐に渡っていた。そのため今後は、校内体制に着目した組織的な支援に関する研究が必要である。

さらに今回は、校内連携に焦点を当てて手立てを考えたが、答申「チーム学校」では、校内連携に加え家庭や地域との連携・協働の体制づくりも重要とされている。校内体制の変化や地域連携など、学校の在り方が変化しようとしている中、今後「チームとしての学校」の実現に向けては、家庭や地域との連携・協働についての更なる研究も必要である。

おわりに

本研究を通して、非常勤職員もチームの一員として、情報を共有し連携できる環境が、大変重要だと感じた。今回の情報発信と連携の工夫が、校内の多様な立場をいかして子どもを支援することにつながつたため、今後も養護教諭として、学校組織の中で継続して取り組み、連携と協働を進めていきたい。

最後に御多忙の中、研究に協力していただいた厚木市立小学校養護教諭の皆様、厚木市立上依知小学校教職員の皆様、そして県立保健福祉大学畑中高子准教授に深く感謝申し上げます。

引用文献

中央教育審議会 2015 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf (2016年5月取得)

椎野裕人・持田訓子・山本美織・金森万美江・

田中恵美 2016 「神奈川の支援教育の成果に関する調査研究－教育相談コーディネーターの取組に焦点を当てて－」(平成27年度 神奈川県立総合教育センター研究集録 第35集) pp. 59-60

参考文献

城所康子 2014 「中学校の養護教諭が行う健康相談活動を校内のチーム支援に生かすための研究－保健室来室者のヘルスアセスメントの実践より－」(平成25年度 神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告 第12集)